

聞召、召出され、今の權現堂の所に居住し、毎度御前にて講釋被仰付也。此相傳を受けたる者は前田出雲大橋善可本を大勢小原惣左衛門三人也。其後稻葉美濃守正則法名泰應望被申越善可を江戸へ被指出、泰應へ相傳すといへども、不通として二十卷迄傳授し歸國す。故に當時江戸の太平記傳は二十卷傳授也と有澤話。とあり。また、微妙公夜話錄に、利常卿御代には御咄衆として、古き事ども見聞せし人々四人、毎夜御夜話に罷出で、四方山の事ども咄せり。其中に太閤秀吉公の儀を申出せば、太閤は無類なる生得也と仰せられ、信長公の儀申出せば、武勇なる御人と仰せられ、又越後謙信の事申出せば、餘程なる生付と被仰たり。楠又は信玄の咄ある時は、ちひさくて役にたぬと仰せられ、度々御頭を御振被遊たり。と見ね、異本夜話錄に、微妙公は太閤の御家風をば殊之外御慕ひ御譽被遊、何事にもはや御弓事には太閤の御事を仰せられたり。信玄の事は少しも御意無之、唯太閤の軍法を御感被成。夫ゆゑにや、甲陽軍鑑などは且て御覽不被遊。常々太平記、徒然草など御覽。また猿のほらなど、申す草紙をば御覽被遊、東鑑を假字書

に爲御寫毎度御覽被遊由、藤田氏咄也。とあり。是らにても、利常卿の時は甲州流の兵談は用ひられざりし事知られ、綱紀卿の時、有澤永貞を用ひられしよりの事なりけり。享保雜誌に云ふ。甲州流の兵學は多くは北條安房守に出づるなり。處士山鹿甚五左衛門、甲府の佐々木四郎兵衛、酒井雅樂頭の家來に熊谷四郎兵衛、京都家に寺井三右衛門、松平越中守の家來に杉山八藏、上方家に遠藤伊兵衛なり。吾が藩の有澤采女右衛門は山鹿、佐々木兩人より請けたりとぞ。甲陽軍鑑を板行せしは、井伊家の岡本半助祐筆西川大學といふ者なり。其の實盜寫にせしゆゑ、落字多しと。また澁江清兵衛といふものあり。越前松平兵部殿にて七百石取りたりしが、流浪人と成り江戸へ出で、上野法印へ立寄り、北條新藏殿參詣の節、法印知る人にして出入いたし、氣に入り、其の頃師鑑抄を逃篇の手傳せしとなり。清兵衛手跡能く殊に學文もありしゆゑ、一入宜し。後新藏殿にゆるされ、弟子を取り、後越前より赦免の趣にて彌、弟子多く、師鑑抄の内にも書入れしたりと。其の後清兵衛が弟子片山了庵第一の者なり。清兵衛書人氣に入とて拔きたる

よし、能く氣を付け見るべし。といへり。此の外甲州流兵學の事共種々載せたれど、爰に略す。

○高臥亭

高臥亭の記に云ふ。梧井莽公、高臥亭東窓の軒端の梅を見て、あかつき起の老の寢覺を思ひやり給ひし詠草、自作のしをりにしるし給へるを見れば、

きのふみし梅の色香にあくがれて

春の夜をさへあかしかねつる

先公常に曉起に書を輯せられしに、いつの年なりけるにか、この花の咲きし頃なるべし。けふしも武貞この樓にありて、梅さかりなる比のこの歌を見いでけるも、猶われも此の花にあかぬ心をつきねかしの天津をしへもはどかりかねて、

梅の花あかぬ色香を水壺に

のこせる春は幾世經にけん

おなじ亭にて、

香ばかりか花もそれかと冬の夜の

月さへ匂ふ窓の梅が枝

其の亭その梅もありて、百年かはらぬ色香窓にみち、鶯の聲ちかく、遠く臥龍山を望みては、糸ゆふまなじりにさへざり、入相の鐘光岸精舎にひゞけば、ぬか味噌の一飯をそなへ、夕やみのかきほに卯花のみだれを驚き、或は屋越の川音を夢にむすび、夜ふけ風の身にしみそめて、桐の葉ふたつおちひとつおち、影たのむ井のはしはになりゆく。さればこの井梧にむかしをしのぶ事あり。曾祖父天淵公、元祿辛未の回祿に家をやきて、わざとならぬ屋をつくり、梧井莽の額をかきて、同門をあつめ、このめる道を談ぜしとかや。今は月前にふみをひらき、みぬ世の人を友とし、むかしの事も思ひつゞけしかど、いさゝかおもかげをうつすのみ。たゞおそれみもたふとぶべきは、君父の惠、あしたには弓箭の正義をおもひ、ゆふべには風雅に筆をとりて、ねぐらする鳥の聲もあだにきかぬゆふべ、思々と閑をおくる。荆棘の中にも梅、梧の開落いくよか時をうしなはむ。此の亭を守る主人、姓は有澤、名は幸鷹、みづから高臥の隱士と潜するのみ。これはよゝのあるじがしるし置かれたるなり。ことし幸鷹ぬしがおとゝひ給ふまに、旅寝